※ この通信は、これまでの号も含め、矢倉小学校ホームページでもお読みいただけます。

草津市立矢倉小学校通信　令和３年８月26日　NO.8

やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

体で覚えたことは…

今年の夏休みは昨年同様、どこかへ気軽に出かけることもできず、家にこもることが多かった。じっとテレビばかり見ているわけにもいかないので、気合を入れて、書斎を整理整頓することにした。と、子どもの頃使っていたリコーダーが出てきたのである。なつかしくなり、少し吹いてみた。

そのリコーダーは、私が小学３年生のときに初めて手にしたものだ。ずいぶん長い間、吹いていないにもかかわらず、なんと「アマリリス」が、少しつまずいただけで調子よく吹けたのだ。この技能は、老いた脳みそのどこに隠れていたのだろうかと不思議でたまらない。うれしくなって、一人悦に入りながら二度、三度と吹き鳴らした。そして次に吹いたのは「かっこう」である。いつのまにか私は童心にかえることができていた。夏の昼下がり、高齢者が多く住む静かな団地に、かろやかな音色が響き渡る。

しばらく楽しんでから、はたと考え込んでしまった。それは、今の私にとって、リコーダーを指導する機会は、これから先、無いに違いない。しかし、こんな風に何かのはずみでリコーダーを夢見心地で吹くことは、きっとあるだろう。そう思うと、とても大切な宝物をみつけた気分になってくる。「日ごろ使わないものはゴミ。だから捨ててしまえば家の中はきれいに片付くものだ。だいたい不要な物がこの家には多すぎる…。」などと偉そうに家人に語って聞かせていた自分を責めるような、そんな気分になっていた。とうぜん、そのリコーダーは、捨てる気になれなくなり、妙な愛着をわかせていた。小学生だった頃の私の歯形がくっきりとついたリコーダーの吹き口。これをじっとみつめ、つぶやいた。「また会おう…」。こうして、母の手作りの布袋に入れ、棚にしまい込んだ。

子どもの頃、身につけたことは、脳みそというより体が覚えているのだという。当時、うまくできていたのに、久しぶりにやってみると、ずいぶんぎこちなくなっていたということは、当然あるようだ。が、少し繰り返せば、ほぼ復元されるという。こうなると、子ども時代に身につけたことは一生の宝物だと言いたくなってくる。今、学校は、コロナ禍で何かにつけて活動が制限され、楽しいことが味わえなくなっている。なんとか工夫し、歳をとっても、心が躍り、童心に還ることができる、そんな宝物を子どもたちに贈りたい。

校長　大林道範